

## 精神神経学雑誌への思い

池田 学 Manabu Ikeda  
日本精神神経学会副理事長

このたび副理事長を拝命しました。たいへん光栄なことではありますが、重責に身の引き締まる思いです。どうぞ、よろしく願いいたします。

久住一郎理事長ならびに水野雅文副理事長が前々号と前号の巻頭言で本学会が果たすべき役割と取り組むべき課題を明確にまとめられました。本学会がめざすところがみなで共有できると思いますので、ぜひご一読ください。

私は、せっかく頂戴した機会ですので、一会員として本誌への思いを少しでも語らせていただきます。私が精神科医になって間もない頃にした論文の1つが、1995年に本誌の97巻3号に掲載された『Pick病のケア—保たれている手続記憶を用いて—』という臨床報告です。私は、指導者に恵まれ、常に研究方法や論文作成の指導を受けることができる環境にいましたが、この研究は外勤先の精神科病院で同世代の多職種の仲間達と取り組んだ内容であったため、論文をほぼ一人で構想し、査読の先生達とも私自身がほぼ一人で2年間やりとりを続けました。論文の構成や考察での論理の飛躍などを厳しく指摘され、修正を繰り返して、世に出していただきました。今から思うと、赤面するような論文の構成ではありましたが、本当に辛抱強く査読というよりは完全に指導をしていただき、伝えたい内容を残しつつ科学論文に仕上げていただいたと今でも感謝しています。その後、長い間大学で過ごしてきたこともあり、いくつか英語の論文を自分で書いたり指導したりもしてきましたが、オリジナリティの高い、思いのこもった論文を挙げろと言われたならば、間違いなくその1つがこの論文かと思います。

その数年後に愛媛大学で教官をしていた際に、本誌の編集委員の末席に加えていただきました。本誌の編集委員会は、私の知る限り国内外の医学系学術雑誌には類をみないシステムが踏襲されていて、一月に一度対面で開催されます。他誌と同様に1つの論文に対して通常は2名の編集委員が査読を担当したのですが（現在は1名の編集委員と学

会員の外部査読者1名）、その査読内容に対して他の編集委員がさまざまな視点からコメントして、最終的な査読案がまとめられることとなります。少なくとも当時は、必ずしも専門領域にかかわる論文の査読を担当するわけではなく、編集委員会で頂戴する諸先輩のコメントは浅学の私には意味さえわからないドイツ語やフランス語の専門用語が飛び交い、最終便で松山空港に戻る頃には心身ともに疲れ果てていました。

このような入念な査読を経て生まれてくる論文の内容が充実していないはずはありません。もちろんエビデンスの創出やグッドプラクティスの共有は、より多くの当事者に還元するためにも英語で世界に発信することがきわめて重要ですが、英語ではなかなか表現しきれない研究内容への熱い思いや考察の微妙なニュアンスが表現できる点は、和文誌の大きな魅力です。また、学位論文よりもはるかにエネルギーを注入した若かりし頃の私のように、これからの精神医学を担う会員の皆様には、ぜひ本誌の素晴らしい編集委員の先生方と論文を通して交流し、指導を受けられることをお勧めします。

この新型コロナウイルス感染症蔓延下で多くの人々の希望となった大谷翔平選手のメジャーリーグにおける無双の活躍も、本人の想像を絶するような長年の努力の賜物であることは当然ですが、高校時代や特に北海道日本ハムファイターズ時代の周囲の理解と指導が大きく影響しているはずです。現代野球の常識では考えられない二刀流を貫くことを希望した本人の意思を尊重し、さまざまな外野の批判をものともせず、ゆっくりと投打に必要な身体能力を高めるトレーニング方法を採用し、本人と一緒に起用間隔なども模索していった過程があったからこそ、ベースボールの本場での規格外の活躍につながったのではないのでしょうか。本誌の投稿者のなかからも、近い将来、世界の精神医学に貢献する規格外のユニコーンが出現することを夢みて筆をおきたいと思います。